

\*\*\*\*\*

## 小特集

### 皇室報道を読む

#### —皇太子「人格否定」発言に関連して

\*\*\*\*\*

昨年12月に带状疱疹を発病し、一切の公務を休んで長期療養に入っていた皇太子妃。『女性自身』が5回に渡って連載した「雅子さま50人の証言 ご静養、本当の理由」(女性自身3月2日号から3月30日・4月6日合併号まで)など、メディアでは女性誌を中心に、御回復を願う記事が誌面を賑わせている。

それらによると、長引く療養の背景には、「お世継ぎ問題」や「子育て」「嫁姑問題」、あるいは「皇室外交の頓挫」「信頼できる側近の不在」などにより、蓄積した疲労とストレスがあるとされる。なかでも、雅子妃を追いつめたとされるのが、昨年12月9日の湯浅宮内庁長官による「秋篠宮さまのお考えはあると思うが、皇室の繁栄を考えると、3人目を強く希望したい」という発言である。この問題は女帝論とも関係し、皇室、そして天皇という存在を改めて問い直す動きに繋がるものである。

本小特集では、3月から5月にかけて掲載された週刊誌の皇室記事を概観することで、5月10日の皇太子発言に至る流れをおさえると共に、報道の論調を分析することで、読者にとって皇室が、どのように読まれているのかを考察する。

#### ◆3月下旬 「家族水入らずの癒しの時間」

体調不調から、3月14日の天皇陛下の古稀の祝賀会も欠席することになった雅子妃は25日、小和田家の親戚筋が所有する軽井沢の別荘での転地療養に出発した。実母・優美子さんが迎える現地には、父・小和田恒氏もオランダから一時帰国して合流し、実質的な「里帰り」と言われた。

この件について各誌は、「今回の「癒しの旅」で、雅子さまの笑顔が戻ることを祈りたい」(女性セブン 4月8日号・3/25発売)、「ご両親とともに心温まる「癒しの時」をごゆっくりと過ごされることを願いたい」(女性自身 4月13日号・3/30発売)、「雅子さま笑顔が戻った 心を癒した「家族の時間」!」(女性自身 4月20日号・4/6発売)など、皇太子御一家と小和田家の「水入らず」の一家団欒により、雅子妃が「癒され」、病状が好転することを期待する記事を掲載している。

#### ◆4月 「雅子さまバッシング」

軽井沢での滞在は当初1週間程度の予定であった。しかし4月2日、一転して帰京の延期が発表され、療養は約1ヵ月に渡って継続された。この帰京延期はマスコミの論調に変化を与えた。改めて「御病状」と問題の深刻さを伝える記事の中に、「雅子さまに「逆風」」(女性セブン 5月13日20日合併号・4/21発売)「雅子さまを追いつめた「ワガママ病」という批判!」(週刊女性 4月27

日号・4/13発売)、あるいは、皇室、宮内庁関係者筋などから「バッシング」を危惧する声挙がっているという指摘(女性自身5月4日号・4/20発売)などのように、間接的な表現で、雅子妃を批判する意見がみられるようになる。

おりしも、連休前の合併号の時期であった。4月24日から“みどりの愛護”、そして5月12日からの欧州歴訪にも不参加が決定した雅子妃。遅れる公務復帰に、苛立ちのような不穏な空気を滲ませながら、各誌とも連休明け5月10日の皇太子発言を迎えるのである。

#### ◆5月 皇太子発言と宮内庁批判

皇太子の「人格否定」発言の反響は大きかった。幅広いメディアが関連記事を掲載し、改めて皇室記事の価値を思い知らされた。記事の内容も、前月、前々月より深みを増し、雅子妃の人格を否定したとされる「犯人探し」(週刊文春5月27日号・5/20発売、FRIDAY5月29日号・5/14発売)や、皇太子一家と両陛下の意志疎通に問題があったことを示唆するもの(週刊朝日6月4日号・5/25発売、サンデー毎日6月13日号・6/1発売)、「天皇側近による浩宮会見批判」(週刊現代5月29日号・5/17発売)など、いくつかの切り口が示された。

特に様々な意味で宮内庁には批判が集中した(サンデー毎日6月6日号・5/25発売、アサヒ芸能6月3日号他)。かつて皇太子はプロポーズの時に雅子妃に、「全力でお守りします」と約束したという。たびたび引き合いに出され、読者の共感も高かったと思われるこの言葉通り、皇太子は絶妙のタイミングで異例の発言をすることによって、連休前の雅子妃バッシングの空気を一掃したのである。

#### ◆皇室報道にみる皇室の「象徴」性

いうまでもなく、皇室記事は「独特」である。「宮内庁関係者」「皇族に近いさる人物」など、明示されないニュースソース、同じような構図の写真に婉曲的な表現。その背景には、皇室故に触れることの出来ないある種のタブー—それがマスコミによる自主規制に近いものであったとしても—が存在する。それゆえ多くの皇室記事は、事実の報道というよりも、それを元に推論を重ねながら、特定の方向性に沿って編み上げられた物語の様相が強い。

実は「お世継ぎ」問題に通底しているのは、皇室という「イエ」をどのように継承していくか—すなわち広義の「家事」—という視点であり、宮内庁批判を通して語られているのは、皇室運営という「仕事」をどのように円滑にこなしていくかという観点である。そして前者は女性誌、後者は一般週刊誌に好んで使われる傾向がある。

「日本で最も古い旧家」に嫁ぎ、伝統やしきたりに苦悩する雅子妃。前例主義に硬直した官僚組織に苦言を呈された皇太子殿下。皇室報道が描くお二人のこうした悩める姿は、特別な存在であるはずの皇室を、読者の身近な体験や、ノスタルジックな感情との連続性を持つものとして認識し、共感することを可能にしている。この点からも、今回の皇室報道を通して再確認されたのは、現代日本社会における皇室のある種の「象徴」性だったと言えるのではないだろうか。

〔文責：浅川泰宏〕